

#書評



国際保健のレジェンドと私、そして生涯初のバズり体験

評者 井戸田 一郎
しらかば診療所 院長



WHOをゆく 感染症との闘いを超えて

尾身 茂＝著

定価：本体 2,800 円＋税／A5・176 頁／医学書院／2011
[ISBN978-4-260-01427-4]

私は、現在は一介の開業医ですが、2003 事務所にて、結核対策専門官として南太平洋

会がありました。赴任前の 2002 年 10 月、当時 WHO 西太平洋地域事務局 (WPRO) の事務局長だった尾身茂先生の面接を受けました。ちなみに、私を WHO に誘ったのは、現 WPRO の葛西健先生です。葛西先生は私を事務局長室に連れて行き、尾身先生を紹介してくださいました。当時の私は 30 歳前半で、WHO 内の右も左もわからず、国際保健業界ですでにレジェンドであった尾身先生を前に、カチコチに緊張しました。尾身先生は、テレビでの印象とは異なり、どちらかというと親分肌の方でした。緊張でろくに返事もできない私を、葛西先生が助けてくれたのを覚えています。

COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) 流行による混乱のさなかにある 2020 年 5 月 11 日、参議院予算委員会にて国会議員の質問に対する尾身茂先生の答弁があり、優しい口調で語りかけるように丁寧にお答えになる姿を動画で見ました。国内外の会議において雄弁で大胆にご発言をされる尾身先生を私は知っているので、「ちょっと意外……」と思いつつ見ていたところ、答弁を妨げるようなやじや、期待した内容の答弁が得られなかったことに対するいら立ちの声がありがた驚きました。

あの尾身先生がこんなに優しくお話をされているのに、その国会議員は尾身先生がどのような方かご存知ないのかと思い、尾身先生に初めてお会いした時のエピソードを Twitter に投稿したところ、2 万以上の「いいね」と 1 万近いリツイートがなされ、生涯初めてバズってしまいました (<https://twitter.com/itochama/status/1260012057451061249>)。出版社によると、このツイートの翌日には本書の在庫が尽きてしまったそうです。

WHO で活躍した尾身先生が日本に帰国され、新型インフルエンザ、COVID-19 と、わが国の感染症危機に要所要所で携わっているのは極めて幸運なことです。前述の国会議員をはじめ多くの日本人に、その事実を知っていただきたいという思いでした。ここまで拡散するとは予想しませんでした。私が国際保健を離れてしばらく経ち、Twitter のおかげとはいえ、WHO や国際保健との関わりを思い起こす機会になったことに、不思議な縁を感じます。

2011 年に出版された本書は、尾身先生の半自伝的エッセイです。青春時代の彷徨に始まり、WPRO 地域のポリオ根絶に向けたゼロからのスタートと達成、SARS (重症急性呼吸器症候群) 対策のため WHO が中国と香港に渡航延期勧告を出す際のスリリングな展開、中国政府とのあつれきを覚悟しながらも筋を通された姿勢と、これだけのスケールの危機や困難をくぐり抜けてきた日本人がどれだけのいるのでしょうか。リーダーたるもの、人の立場に立って考える能力が必要であり (これは私もツイートした内容)、また口の堅さも重要と、ニヤリとしてしまうエピソードも紹介されています。

パンデミック対策の主要ポイントとして、まず封じ込めを試み、発生初期のピークの到来を避けることで、社会機能を維持し死者を最小限に食い止めることがあげられます。現在 COVID-19 対策において日本がとっている戦略は、新型インフルエンザ流行前の 2008 年にはすでに立てられており、このセオリーに基づく日本の COVID-19 対策が今のところまくいっていることは周知のとおりです。本書には、パンデミック対策の教訓が明快にまとめられていますが、「喉元過ぎれば熱さ忘れる」です。尾身先生による提言が、果たしてどの程度、その後の感染症対策の準備に活用されたのか、私たちは振り返る必要があると思います。文明と感染症の関係についての記述では、「文明が続く限り、新たな感染症を含む健康被害が発生することは不可避である」とはっきりと述べられており、私たちの生き方や哲学にまで問いかけられています。

2005 年 3 月、私が WHO を退職することになり、マニラでディブリーフィングを行うことになりました。その最中に結核地域アドバイザーだった韓国人の Dong Il Ahn 先生が、「Ichiro (私の名前) はよくやってくれたから、WHO を去る前に事務局長に会ってもらう資格がある」と、多忙な尾身先生の時間を捻出する交渉をしてくださり、尾身先生にお目にかかりました。対面するのは 2 度目です。

WHO で南太平洋諸国を 2 年間わたり歩いたことを報告すると、尾身先生は「そうか、それはお疲れさま」と、初めてお会いした時よりはくだけた調子で声をかけてくださいました。前回に比べると私なりに自信がついた状態でしたが、それでも緊張していて、手にしたデジタルカメラで尾身先生との記念のツーショットを Ahn 先生に撮ってもらうのをすっかり忘れてしまいました。いつかまた尾身先生にお会いできる機会があれば、本書にサインをいただきたいと思っています。 ⑥